

研究ノート

ウェズレー・C・ミッチェルの経済科学の展望

齋藤宏之

概要

W. C. ミッチェルは、人間性の概念を念頭に置きつつ、統計に基づく実証研究を遂行した。彼は、特定条件下における経験的内容・観察に照らして、経済理論の真偽を検討するうえで、その類型間の差別化要因として、人間性の概念に注目したのである。経済学の先入観を暴露し、その経済学の構造全体を支える土台および論理を詳らかにした観点からは、ミッチェルのいう科学的理論の真意を理解することができる。従前の経済行動をめぐる合理性の概念には疑問を呈し、経済を体系的・客観的に分析するために統計的測定を行った。それにより、経済機能に関する検証済みの知識を拡張させた。また、量的分析によって得られた制度の累積的变化の理解に基づいて、公共政策を導く必要性を重視した。こうした諸点が、ミッチェルの論文「実証研究と経済科学の発展」の検討を通して明らかになった。

I ミッチェルの制度主義

ウェズレー・C・ミッチェル (Wesley Clair Mitchell) は、ソースタイン・B・ヴェブレン (Thorstein Bunde Veblen) やジョン・R・コモンス (John Rogers Commons) と共に「経済思想へのアメリカの貢献¹⁾」と評される制度学派の大立者のひとりである。彼は統計研究を駆使して、ヴェブレンの先駆的研究により堅固な土台を提供した。

ミッチェルによれば、従前の経済学者は抽象的

に思弁し、整理統合された思想体系を展開してきたが、自らが導出した結論と現実との関連はあまり検討してこなかった。

したがって彼は、そうした経済学者の見地を疑問視し、現実の過程や意識的習慣を重視した。その結果、広範な研究を遂行し現実を理解する過程で、人間性の概念を強く意識していくこととなる。快楽主義的見地から合理的な選択を行う孤立した行為の主体者としての経済人は、思弁を容易にするよう心理学的に劇画化したものと捉え、「帰属経済動機に基づく当てにならない論法²⁾」ではなく、検証可能な証拠に拠る所を求めた。

経済学者の分析に対して、より適切な心理学上の土台となる機能心理学が発達している状況に鑑みれば、ミッチェルの考えでは、経済学が、金銭的論理体系、あるいは非存在下での静態均衡の機械論的研究ではなく、その性格は人間行動の科学へと改められている。経済学は、社会のなかで人間はどのように行動するか、つまり人間活動の一定の様相を論ずる。それゆえ本能的要因の組み合わせの変化により、文明人の行動は未開人と差異化する。人間性の変化は大部分文化の進化に起因する。そこで変化しつつある制度に現れる行動に注意を集中する。それは、制度が個人行動を導く際の強力な作因となるため、個人行動を適切に説明するには、制度的観点から行わなければならないからである。ミッチェルは、自然科学の方法に則って、人間行動の研究に科学的に取り組み、行動法則を経験的に分析し、内観に依拠することなく、大量観察法、帰納的推論により、作業仮説を客観的に検討した。

そこでミッチェルは、客観的データに基づき、それによって理論が経験的に妥当であるか検証する。つまり統計的に経済データを処理する方法を広範に利用し、経済行動を観察する。統計的方法を行動の観察に適用し、観察の統計的記録を基に、経験的に真であることを確かめる。こうして統計的方法を行動の観察に適用して実証・統計的分析を利用しつつ経験的研究を推進する。言い換えれば、社会統計学の技法によって現実的に研究を行い、経済機能に関する検証済みの知識を拡張して、経済行動の理論を包括的に立てようとする。この際、人間行動に関わる他の学問分野の成果を摂取しながら、同時にその学問の発展に寄与することが可能であると考えた。

かくしてミッチェルは、心理学研究から行動研究の重要性を学び取り、経済学を「行動の科学³⁾」と定義するに至った。さらに思弁をプラグマティックにテストすべく、経験的な科学概念と緊密な関係を保持しながら、制度が生み出す大衆行動を研究する。制度は行動を規格化するから、制度を扱うことは妥当な一般化に通じる。行動を客観的・経験的に研究するうえで統計を重視し、観察記録を制度的に解釈する。

このような戦間期におけるミッチェルの実証的企業循環研究は高く評価され、彼は合衆国の統計研究の代表的存在として名声を得るに至った。

そこで本稿では、人間性の概念を強く意識しつつ、統計に基づく実証研究を推進する立場から、ミッチェルはどのように経済学の構造全体を支える土台と論理を明らかにしているかみていくこととする。これは、ミッチェルのいう科学的理論の真意を理解することに繋がるからである。この点に接近するために、ミッチェルの「実証研究および経済科学の発展」(“Empirical Research and the Development of Economic Science”⁴⁾)を取り上げ、検討することとする。

II 実証研究と経済科学の発展

ミッチェルは今日の状況について、第一次世界大戦終了時以上に、より広範で貴重な一団の客観的データの利用とこれらのデータから正当な結論を引き出す多様かつ強力な方法に基づいて、問題点を明確に、また問題同士の関連もしっかり把握できているとみていた。

経済学者の立場は、現在の業務との関係は希薄であるという点で、実務を導く手助けをしてきた他の知的職業とは異なっていた。経済学者は助言を多く与えたけれども、ほとんどは頼まれもせずしてきたことであり、それらは自由財とみなされてきたとミッチェルはいう⁵⁾。

このような立場を、アダム・スミス(Adam Smith)、ジェレミー・ベンタム(Jeremy Bentham)、トマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus)、デイヴィッド・リカード(David Ricardo)、ジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)、カール・マルクス(Karl Marx)が取ることは、すなわち性向と環境が駆り立てる知的興味にかなり自由に従ってきたことであるし、それゆえ人々にとって関心のある問題を論じることができた。そして、抽象的に思弁する優れた才能をもつ論理学者は、「見事に整理統合された思想体系を展開したが、自らが導き出した結論と現実が起こっていることとの関連をあまり気にすることはなかった⁶⁾。」

しかしミッチェルによれば、実証的研究に関心のある経済学者は、上述の見地に欠点を見出した。そこで、現実の過程を可能な限り学び、広く行き渡っている意識的習慣に精通しようとした。

これらの専門家たちは、経済理論の恩恵をあまり受けずに研究することがしばしばある。理論家が実証的知識の恩恵を受けないことと同様であった。「理論家でも、アダム・スミス、マルサス、アルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall)のように、事実のデータを熱烈に研究してきた者や、実証研究者でも、ウィリアム・スタンレー・

ジェヴォンズ (William Stanley Jevons) のように明敏な理論家はあまり多くはない。これらの研究者たちですら、経済理論と事実に知識に対する自らの2つの関心を、著作においては独立させた⁷⁾とミッチェルは捉える。

翻ってミッチェルによれば、個人は満たすべき条件を述べたり見抜いたりできなくなっているから、われわれは自分以外の人たちが蒐集した情報を当てにしなければならない。報告を評価し、いかなる活動方向が最良の結果をもたらすかを決定しなければならない。ミッチェルは、この点で、経済学者らの専門的分析者の必要性を認識する⁸⁾。

ミッチェルは、このような経済学者の貢献に対する需要の増大は、永続的であるけれども、ランダム摂動にも支配されているという。その典型が戦争である。「国家計画を立案・遂行し、国家計画の諸部分が不測の新情勢にかなうように継続的に再調整⁹⁾」しなければならないがゆえに、才能のある経済学者の名声やその地位が保たれているとミッチェルは考える。経済を戦時動員するうえで、様々な要素がどのように互いに調整されるべきかを決定するとき、多くの諸部分から成っている経済を全体として考察し、そして諸部分の各々は他の部分全てに影響を及ぼし、また影響を受けるとする経済学者の考えは役立った。その一例としてミッチェルは、レオン・ワルラス (Léon Walras) の連立方程式体系、マーシャルのモットー「一のなかに多を、多のなかに一を」を挙げる。加えて、価格の相互関連の認識、貨幣支払いの流れにおける既存の調整の変化が他の要因に及ぼす影響も経済活動の相互依存の概念の例として指摘する¹⁰⁾。それゆえ「国の資源を戦時動員する仕事を担っている役人にとって、この心の習慣を身につけている人たちは有能な補佐官となる¹¹⁾」と述べる。

またミッチェルは、戦時研究に深く関与する経済学者が満たすべき要件を列挙する。「第1に、自身が選択した問題に取り組むのではなく、他者から課された問題に取り組む¹²⁾。」その経済学者

の進取の知的精神は、国家計画に従わせねばならない。第2に、量的取り扱いと時間的要因への留意を必要とする。第3に、予測しなければならない。他の条件が同じ状態のままではないという仮定に基づいて推測する。最後に、経済学者は超然として活動方向を適切に示し誤りを批判してきたが、その代わりに喧噪のなかで賢明な決定を下し誤りを犯せば責められることとなる¹³⁾。

ミッチェルの展望では、いわゆる理論家は、現実的な気質をもった研究者の方法や発見を採用する一方で、そのような研究者が、理論家の概念や手順を自由に用いることにより、近いうちに科学と呼ぶに相応しい経済学が始まる。

しかしミッチェルは、その目的に向かったの飛躍的進歩は期待できないという。思弁的推論と比べて実証研究は、労力や時間を要し、財政支援に依存しているという欠点を有するからである。実証研究者は、大量に観察しなければならないし、現実の意識的習慣を深く知る必要がある。そうして得られた実証的発見は、歴史的かつ地理的に条件づけられており、不確実性の余地があると指摘する。

ミッチェルの考えでは、現在、アダム・スミス、マルサス、リカード、J. S. ミル、マーシャルらを越えられておらず、経済学者が利用できる格好の好機を作った大家はいなかった。アダム・スミスは、その当時の政治算術をほとんど信頼していなかった。マルサスは生まれながらの現実主義者であったが、蒐集したデータは、自身の問題を扱うには不十分であることが多かった。リカードは、自分自身の研究に関わる狭隘な領域を鋭く観察したけれども、農業、製造業、商品取引というより広範な領域を探究する才能には恵まれていなかった。J. S. ミルが『論理学体系』(*A System of Logic, Ratiocinative and Inductive*) において重要視したことは、「推論科学全てにおいては必要でない要素、つまり特異性の経験による検証である。推論の結論と観察の結果との比較である¹⁴⁾。」しかしミルの『経済学原理』(*Principles of Political*

Economy)には、自らの指図に従うのに必要なデータもなければ技術もない¹⁵⁾。マーシャルは、経済学では「量的に分析することが必要であると感じていた¹⁶⁾」けれども、自身の著『経済学原理』(*Principles of Economics*)を質的分析の改善に充てた。「より高次の難解な課題は、綿密な現実の統計が徐々に発展するのを待たなければならない¹⁷⁾」と信じたからであった。

以上の議論を踏まえてミッチェルは、経済科学の発展のために何を行うことができるかについて考えを巡らせていく。彼によれば、「われわれが人類のために最大限尽くすことができる奉仕は、人間がどのように行動するか、また経済組織はどのように機能するかをより深く洞察することである。これらの基礎的条件が良くなるなら、発見したものは無数の現実問題に必ずや適用される¹⁸⁾」からである。そこでミッチェルは、経済学者に関わる要因をほとんど全て総括している「分配国民所得」というマーシャルの概念に着目し、彼の所説を引き合いに出す。

「生産される商品全ての純総体額は、それ自体真の源泉であり、そこからこれらの全商品に対する需要価格が生じ、それゆえこれらの商品を作るうえで使用する生産要素に対する需要価格が生ずる。あるいは同じことを別に言い換えると、分配国民所得は、一国内にある生産要素全ての総純生産であると同時に、その生産要素全ての唯一の支払い源でもある。分配国民所得は分けることができる。労働賃金、資本利子、そして土地や生産に対する他の差別的優位性をもつ生産者余剰ないしは地代である。分配国民所得は、これら所得の全体を構成し、分配国民所得の全体は、上記の各種所得に分配される。分配国民所得が大きければ大きいほど、他の条件が同じなら、所得の各々の分け前はそれだけ大きくなる¹⁹⁾。」

マーシャルの概念は、実証研究によって有効であることが分かってきた。「マーシャルが定義したフロー、様々な工業原料から生ずる寄与率、財の主たる利用法、いくつかのタイプの所得、様々

な大きさの所得を受け取る個人・家計の数の信頼できる測定法を生み出すことによって²⁰⁾」、彼の概念の有効性は増してきた。ミッチェルのみところでは、国民所得の概念が、所定の場所と時間に流布している制度にどのように適合するかが明らかになりつつある。

しかしこのように発展してきた研究が、現状に留まってしまうことに誰も満足していないとミッチェルはいう。全体の構成要素の相互関係を動的に把握し、マーシャルの概念を量化し、新旧問題を体系的に考え、これらの問題は、生産と分配を同一過程の2つの側面とみなすことで緊密に連結される。「その過程において、価格決定が重要な役割を演ずる。純生産あるいは国民所得のいかなる要因を扱うときでも、この要因が他の諸要因に時間が経過するにつれてどのような影響を与えるのか、また他の諸要因がその要因にどのような影響を与えるのか把握することができる²¹⁾。」

それゆえミッチェルは、「……マーシャルが経済理論を統合するうえでの重要な貢献は、将来に向けて見越した量的研究の統合となる見込みがある²²⁾」とみる。詳細な長期的評価方法や時系列の関連を確定する綿密な方法の重要性が認識され、質的分析と量的分析との調和を進展させる。

このような過程でミッチェルは、固定価格に入れて計算される国民所得を制限する要因が最重要視されているという。古典派経済学者は、最も重要な限定要因を、土地の希少性と仮定することもあれば、資本の希少性と仮定することもあった。その後富ならびに所得の不均衡分配が、貧困の根本的原因とみなされた。所得を再分配して生産が増大しなければ、所得を均一化しても、十分な生活水準はもたらされない。ジョン・メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes)は、企業循環に目を向けさせることで、期待できる斬新な方向性を打ち出した。またミッチェルは、安定的で高水準での雇用という経済政策の目的を達成する方法と手段を研究することは、精力的に推し進められているし、将来拡大する見込みがあると述べる²³⁾。

そこでミッチェルは課題のひとつとして、資源保護・増大を浮かび上がらせる。自然資源が、最終的には生産に限界を課すとみなしてきたようにみえるという。そして、自然資源も文化が生み出したと考えるようになる。移住者が知識という形でもたらす資源もあれば、原子エネルギーのように発明される資源もあるし、科学という重要な資源もある。こうした増大しつつある資源を活用できるように、制度を適合させなければならないと考える。

このように従前以上に広範な研究を遂行するには、人間性の概念を強く意識するのも当然であるとミッチェルは捉える。その結果、人間性とその機能を考えるに至る。一定の行動を心理的に特徴づける暗黙的あるいは明示的仮定としてミッチェルが挙げるのは、ケインズの「消費性向」および「流動性選好」、アダム・スミスの「交換性向」、ベンタムの「幸福計算」、マルサスの「生殖本能」、ウォルター・バジヨット（Walter Bagehot）の「慣習の固い殻」、オーストリア学派の「限界効用」、フランシス・イシドロ・エッジワース（Francis Ysidro Edgeworth）の「無差別曲線」、ヴェブレンの「機械過程の文化的影響範囲」、ジョゼフ・アロイス・シュムペーター（Joseph Alois Schumpeter）の「ルーチナー」と「革新者」との区別、アーサー・セシル・ピゲー（Arthur Cecil Pigou）の「過度の楽観」と「過度の悲観」の流行、ジークムント・フロイト（Sigmund Freud）の「潜在意識」に隠れている「コンプレックス」である²⁴⁾。

この点に鑑みて、ミッチェルは経済人の概念をめぐって次の見解を披瀝する。

「『経済人』は、心理学的に劇画化したものであった。思弁を容易にするよう慎重に描かれていた。しかしこのことは、人間とは極めて異なる資質があると考えられる生物なら、どのように行動するか略述することであると予め宣告していた。経済的費用・経済的利益を抜け目なく計算する見地からのみ、人間がどのように行動するか説明すると

きは常に、事実上その人体模型の心理学を生き返らせている²⁵⁾。」

そこでミッチェルは、現実には何が起っているか理解しようと努力すると、批判的に人間性の概念を考察せざるを得ないと述べる。ミッチェルによれば、大量観察法、帰納的推論に頼ることができる、内観にはそれ程頼る必要はないし、作業仮説を客観的に吟味することができる。生理学者と心理学者が提供し解釈する、心と体の機能に関する基礎観測の助けを借りられる。大企業や政府から資料の提供を受けることができる。大規模事業は、潜在顧客の評価過程に影響を及ぼそうとする販売促進活動に大金を投じている。販売記録の分析を通して、大衆が様々なタイプの訴えにどのように反応するかをめぐって多くを学習することができる。これらの情報の宝庫を利用することや、大企業の人事担当重役が類族反応をめぐって重要な結論を導き出すことをミッチェルは期待する²⁶⁾。

またミッチェルによれば、エルンスト・エンゲル（Ernst Engel）が1850年代に支出の法則を定式化して以来、生活水準と効率水準との関係、高賃金率と賃金所得者に対する保護、所得変化に伴う支出・貯蓄パターンの修正が研究対象となっている。将来重要になるとミッチェルがみなす閑暇をどのように使用するかという問題は、「……需要され、そして生産される類いの財、人々が住む場所、自分たちが着手する趣味、そして私の知らないその他のものにも深く影響を及ぼす²⁷⁾。」

このような経済学は、考え出されているような経済学と比べ、その限界をはるかに逸脱してしまっているとみえることもあるかも知れないとミッチェルはいう。人類が望む経済学では、「様々な国のひとり当たりの実質所得の相違や個々の国のひとり当たりの変化を説明しようとする努力は、人間に注意を集中させる²⁸⁾。」この過程で、人間行動に関わる他の学問分野の成果を取り入れつつ、同時にその学問の発展に貢献するとミッチェルは捉える。再度「……論理的厳密さばかりでなく、

証拠の妥当性をめぐって科学的水準を満たす責任も負わされている²⁹⁾」点を指摘するのを忘れない。

卓越した資料、強力な道具を用いながら、才能のある研究者を満足させる課題を遂行して行く如上のような研究は、骨が折れ担う責任は重いものの、経済学者の前に魅惑的な展望を開くに至るとミッチェルは結論づける。

Ⅲ ミッチェルの経済科学観

以上のミッチェルの所説を整理しながら、そのなかで重要と考えられる点を取り上げ検討してみることとする。

ミッチェルは、今日では経済学者が客観的データを利用でき、そこから正当な結論を引き出す多様かつ強力な方法を用いることができる有利な立場にあるとみる。

現在の業務との関係が希薄な立場を取ってきたアダム・スミス、ベンタム、マルサス、リカード、J. S. ミル、マルクスは、ミッチェルによれば、関心のある問題を論じ、首尾一貫した思想体系を展開した。けれどもこの見地に欠点を見出した実証経済学者は、現実の過程や意識的習慣を重視した。

こうしてミッチェルは、実証研究と思弁研究の自らの分析に基づき、科学と呼ぶに相応しい経済学が始まるとみる。同時に経済学者に対する需要の増大を、戦争に代表されるランダム摂動にも見出す。全体は諸部分から成り立ち、諸部分は相互依存するという心の習慣は、戦時動員の研究において多大な貢献をしたとミッチェルは捉える。

またミッチェルは、実証研究は歴史的かつ地理的に条件づけられ、不確実性の余地がある点認めながらも、人間行動ならびに経済組織の動きについての洞察力を得るとみる。

ここにおいてミッチェルは、マーシャルの分配国民所得という概念に着目する。測定法を生み出すことによって、国民所得の概念の制度への適合性を模索することができると考えたからである。この研究を、全体の構成要素の相互関係の動態的

理解、マーシャルの概念の量化によってさらに展開することで、質的分析と量的分析との調和を図っていかねばならないと考える。

この過程でミッチェルは、土地・資本の希少性、富・所得の不均衡分配、企業循環など、国民所得を制限する要因が重要視されるという。また増大してきた資源を、現在の制度に適合させるように利用することにも注目させる。

またミッチェルは、行動を心理的に特徴づける仮定として人間性の概念を意識せざるを得ないとみる。なかでも経済人を心理学的に劇画化していると批判的に考察しつつ、大量観察法、帰納的推論、生理学者や心理学者の基礎観察、大企業や政府からの資料を枢軸として、意義ある結論を導出すると認識する。

如上のような経済学は、従前の経済学の限界を越えている。人間行動に関わる隣接諸科学の成果を得ると同時に、それらに一定の貢献を果たすことも期待できる。経済学者の眼前には魅惑的な展望が開かれていると述べて終える。

このように人間性の概念を念頭に置きつつ、同時に統計に基づく実証研究を重視している点に鑑み、ミッチェルの経済思想を掘り下げてみようと考えている。ミッチェルのいう科学的理論の真意を理解することに繋がるからである。

さてミッチェルは、本稿で取り上げた論文において、ランダム摂動に言及している。大惨事が社会・文化を変えるうえでの大きな要因であると考え、「未開人と野蛮人は保守的な創造物であるので、大惨事そのものが、定着した習慣を断ち切り、古いタブーに批判的となり、知性を自由に使用させるようにすることができる³⁰⁾。」

物理学や産業技術においては、ミッチェルの所説では、未開人と異なり、進歩するために大惨事に依存することはない。科学や産業の分野においては、「旧来の公式化を批判し、祖先が受け入れたことを吟味し、検証作業をする習慣を発展させてきた。良いものをより良いものを得るために捨ててきた……³¹⁾。」検証済みの方法を、将来の

計画を立てるための準備の礎とする。しかし社会組織は、大惨事というストレスを受けている間急速に進歩するけれども、未開人の心に特有の保守性は保持されているので、ストレスが過ぎ去ると、祖先の安楽な考え方を再び信頼することに戻ってしまうとミッチェルは考える³²⁾。

また、実際、戦争がもたらした熱の入った愛国心がわき起ると前進すると考えられることもあるという。事態は、方法によって変わらなければ、騒動によって変えることに期待することができる。しかし扇動や階級闘争による改革はぎくしゃくした前進方法であり、不愉快でエネルギーを浪費する。それゆえ扇動あるいは階級闘争ではなく、知的な検証作業ならびに詳細な計画化こそが必要だと考える。そして、それをを行うためには、知識、特に人間行動の知識が不可欠である。ミッチェルは、より確固たる前進方法を考案するために、戦時の愛国主義ではなく知性に期待を寄せる³³⁾。

そこでミッチェルは、知性を十分に発揮させるべく、最も進歩的な分野で既に使われている方法を、社会組織に適用することを主張する。「科学や産業においては……大惨事が新しい方法をわれわれに強いるのを待っていない³⁴⁾。」量的分析に頼って、改善を試みる。

この点に鑑みれば、ミッチェルのみるところでは、社会科学は現状において必ずしも役に立たない。「未熟で思弁的議論の余地が大いにある³⁵⁾。」社会科学の最も精力的な主唱者ですら、「依然として新たな『見地』を展開する段階にあり、先駆者の分析をさらに進める代わりに、異なる計画に繰り返し着手している。……要するに社会科学は依然として子供である。成長して強健な成人になると確信もしていない……。³⁶⁾」これまで長い間、思弁という見えない鉱脈を採掘してきたが、利益はほとんど得られなかった。「恐らく社会科学は、力学よりも形而上学、化学よりも神学に似ているのが分かるだろう。社会科学の集団は、混戦によって自らの運命の大部分を作り上げるのが常であろう。そしてその混戦においては、詐欺行為・善意・

熱情・経験則が、測定・計画化より強力な要因となる³⁷⁾。」ミッチェルは、「この鉱脈を、有している知性とエネルギー全てを使って掘り尽くし、それが豊富であるのか不毛であるのか明白にすること³⁸⁾」に課題を見出す。

翻って経済理論は、ミッチェルの考えでは、経済過程の刺激に対する特異的の反応であり、一時的性質を帯びたある特定の制度に関連する。つまり時間と空間において、結果として生ずる分析・一般化である。ミッチェルは、『経済理論の諸類型』(*Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism*)においてこう述べる。

「経済学者たちは、自らの研究は論理的に立てられた問題に対して、思考力を自由に働かせることから生まれると考えやすい。……しかし自由な思考力は、自らが成長してきた環境が陶冶したとは認識しない。つまり自分たちの思考は社会が生まれ出すとか、いかなる重大な意味においても環境を超越することができないとはめったに認識しない³⁹⁾。」

ミッチェルは、経済理論を特定条件下における経験的内容・観察に照らして真偽を検討する。主要問題をめぐり、特定の脈絡のなかで生成された仮定を明らかにし、その仮定の変化した状況下での妥当性を綿密に考察する。経済学の先入観を暴露し、その経済学の構造全体を支える土台と論理を明らかにする。

その結果ミッチェルは、これまでの経済学は、大部分が「帰属経済動機に基づく当てにならない論法⁴⁰⁾」に関わってきていると捉える。それゆえ検証可能な証拠に基礎づけられていない。上述のように社会科学の未熟性・思弁性に言及するゆえんである。この点において、経済理論の類型間の差別化要因として人間性の概念に注目すると、一定の心理学的範疇がほとんど意識されることなく用いられて、人間行動が論理的に考えられていることから、経済理論には人間性の考えが組み入れられていると解するに至る。また、経済理論は単純化しすぎた状況下で、経済行動それ自体が合理

的であるとする想像上あるいは仮説上の個人をめぐる人間性に関する限定的仮定に基礎づけられているという。しかし「……経済行動それ自体が合理的であると仮定して経済理論を展開する方法は、理論を構築する最も安易な方法であるけれども、この方法は、事実と反する仮定に基づいている⁴¹⁾。」ミッチェルは次の見解を披瀝する。

「……経済学者は、公に議論する際、形式的な根拠に基づいて自分の理論を擁護しなければならない立場に至るにつれて、学説に不備があることが論証されたのに、批判に対して一連の不適切な弁明を行った。経済学は当時、厳密に論理的な様式で、仮説に基づいて一連の議論を行うとみなされていた。しかもその議論は、若干の前提のうえに打ち立てた。経済学者は自らが達した結論が正しいかどうか疑われると、経済学者なら誰しも述べたであろうことがある。『もちろん、私は引き合いに出された事実が理論と一致しないことは認めるが、理論は仮説的に構築したものであることを想起しなければならない。理論は若干の仮説に基づいている。これらの仮説から首尾一貫して推論することによって、理論は演繹される。それゆえ理論は真である。事実が理論と一致していないことは、現実の生活に流布している状況が、仮説的前提に緊密に一致していない状況であることを意味するにすぎない。そして経済学者は、その前提に基づいて推論してきた⁴²⁾。』」

したがってミッチェルは、経済的現実の観察が、適切に再構築された概念と適合しないとみる。事実を考慮せずに、一般化を行う独断の様相を明るみに出す。

そこでミッチェルは、社会統計学に注目する。なぜなら、社会現象を測定し物理科学の進歩的特徴を多く備えており、数学的定式化になじみやすく、集団現象の予測が可能であり客観的だからである。正しいのか誤っているのか、その正誤を論証することが可能である⁴³⁾。ミッチェルはこう述べる。

「統計学者は、新たな見地を展開するに当たっ

て、最初からやり直して自らの科学を開始しているばかりではない。ある研究者が中断したところで、それに続く研究者は、さらに多くのデータを蒐集したり、新たな分野に範囲を広げたり、より強力な分析手法を用いたりしながら開始する。これらの諸点全てにおいて、社会統計学の立場や見通しは、社会科学より自然科学に近い⁴⁴⁾。」

そのうえでミッチェルは、2つのタイプの統計を明確に区別する。これまでの状況の記録として用いる統計（記録統計）とどうするかを計画するための根拠として用いる統計（計画統計）である。記録統計は軽視すべきではないし、また範囲を拡大し、改善しなければならないとミッチェルは述べる。しかし、十分に組織立てられた最新の有益な計画統計を発展させ、それを利用していく方を重視すべきであると認識する。統計のもつ実用的価値を見出せるのは、政府の諸問題を上首尾に処理するうえで、直接的に適用できるからである。

ミッチェルは、「統計編纂物の拡張と改善は……経済理論が発展するのに最も重要である。……経済学は、自らが経済過程をめぐって与える説明が、客観的にみて妥当であるかに関与している⁴⁵⁾」とし、現実的で有益な経済学の学問分野に土台を提供する、つまり経済を適切に分析するには、統計的証拠が必要になると考える。統計的測定によって、研究は検証可能となり、それゆえ客観的になるからである。

換言すれば、ミッチェルは経済行動を経験的に観察し、統計的に測定し、統計データの増大や統計的手法の改善、つまり統計編纂物ならびに統計的な根拠に基づいた分析を通して、経済機能に関わる検証済みの知識を拡張していこうとする。目的は、経済行動の包括的理論を立てることである。

したがってミッチェルは、測定に基づいた経済過程は、複雑に錯綜した秩序であると認識し、社会統計学の技法によって体系的に観察する。客観的で現実的な研究を行い、経済機能に関する検証済みの知識を拡張していく。

社会統計学は、ミッチェルの立場に立つと、政

府に、そしてそれを通して人類に大きく貢献する。社会の事実を量的に理解することによって公共政策を導く。換言すれば、社会組織が累積的に前進する方法を発展させる。こうしてミッチェルは、制度の累積的变化を主要研究対象とする理論を科学的と捉えるに至る。

注

- 1) Stanley L. Brue, Randy R. Grant, *The Evolution of Economic Thought* (Mason: South-Western, 2013), p. 395; Cf. Allan G. Gruchy, *Modern Economic Thought: The American Contribution* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967).
- 2) Wesley C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money and Other Essays* (New York: Augustus M. Kelley, Inc., 1950), p. 375.
- 3) *Ibid.*, p. 372.
- 4) Wesley C. Mitchell, "Empirical Research and the Development of Economic Science," in *Economic Research and the Development of Economic Science and Public Policy* (Ann Arbor: University Microfilms International, 1946), pp. 1-20.
- 5) *Ibid.*, p. 4.
- 6) *Ibid.*, p. 5.
- 7) *Ibid.*, p. 5.
- 8) *Ibid.*, p. 6.
- 9) *Ibid.*, p. 6.
- 10) *Ibid.*, pp. 7-8.
- 11) *Ibid.*, p. 8.
- 12) *Ibid.*, p. 8.
- 13) *Ibid.*, pp. 8-9.
- 14) John Stuart Mill, *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive* (New York: Harper & Brothers, Publishers, 1882), p. 628.
- 15) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 11-12.
- 16) Alfred Marshall, *Memorials of Alfred Marshall*, edited by Arthur Cecil Pigou (London: Macmillan, 1925), p. 301.
- 17) *Ibid.*, p. 324.
- 18) W. C. Mitchell, *op. cit.*, pp. 12-13.
- 19) Alfred Marshall, *Principles of Economics* (London: Macmillan, 1910), p. 536. 馬場啓之助訳『経済学原理』第4巻, 東洋経済新報社, 1984年, 46ページ。
——訳文は邦訳書によったわけではなく、私の自由に訳している。
- 20) W. C. Mitchell, *op. cit.*, p. 13.
- 21) *Ibid.*, p. 14.
- 22) *Ibid.*, p. 14.

- 23) *Ibid.*, p. 15.
 - 24) *Ibid.*, pp. 16-17.
 - 25) *Ibid.*, p. 17.
 - 26) *Ibid.*, pp. 17-18.
 - 27) *Ibid.*, p. 18.
 - 28) *Ibid.*, p. 18.
 - 29) *Ibid.*, p. 19.
 - 30) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 48.
 - 31) *Ibid.*, p. 48.
 - 32) *Ibid.*, pp. 48-49.
 - 33) *Ibid.*, pp. 49-50.
 - 34) *Ibid.*, p. 51.
 - 35) *Ibid.*, p. 51.
 - 36) *Ibid.*, p. 51.
 - 37) *Ibid.*, p. 51.
- ミッチェルは、その論文「1920年の危機と企業循環規制問題」(Wesley C. Mitchell, "The Crisis of 1920 and the Problem of Controlling Business Cycles," *The American Economic Review*, Vol. 12, No. 1, Supplement, Papers and Proceedings of the Thirty-fourth Annual Meeting of the American Economic Association, March, 1922, p. 32.)において、わが国の問題に対して勇敢で建設的な態度を取らねばならないとし、ジョン・デューイの論文「社会心理学の必要性」の一節を次のように引用している。
- 「社会科学は、私には自然科学が17世紀初頭の3世紀前に位置していたところにはほぼ現在も留まっているように思える。同一の停滞的で妨害的傾向がある。つまり、外見上与えられているありのままの事実の傍観者・分類者・弁明者の態度から積極的な参加者・修正者の態度へ、卸売組織の態度から小売再編成の態度への移行が停滞気味であり妨げられがちである。」John Dewey, "The Need for Social Psychology," *Psychological Review*, Vol. 24, No. 4, 1917, p. 275.
- 38) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 51.
 - 39) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1967), Vol. I, pp. 36-37. 春日井薫訳『経済理論の諸形態』第1分冊, 文雅堂銀行研究社, 1971年, 59ページ。
 - 40) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 375.
 - 41) Wesley C. Mitchell, *Types of Economic Theory: From Mercantilism to Institutionalism* (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969), Vol. II, p. 787.
 - 42) W. C. Mitchell, *Types of Economic Theory*, Vol. I, p. 535.
 - 43) W. C. Mitchell, *The Backward Art of Spending Money*, p. 52.
 - 44) *Ibid.*, p. 52.
 - 45) *Ibid.*, pp. 375-376.